

## 研究成果報告書

所属：北京大学

役職：助理教授

氏名：解 璞

### 研究結果

1920年代の中国文壇における夏目漱石文学の翻訳とその周辺：魯迅、謝六逸における象徴主義的表現技法の受容を中心に

本研究は、魯迅と謝六逸の文学活動を中心に、1920年代の中国では漱石小品はいかに移入されたかを、翻訳と時代背景、創作における表現技法の吸収という二つの側面から考察したものである。

#### ①魯迅の翻訳と受容

「2020年度日本語日本教育と日本学研究国際シンポジウム」（同済大学主催）において、中国文壇における漱石文学の翻訳、漱石と小泉八雲の関連課題について、先生方から貴重なご教示を受けた。魯迅訳「懸物」「クレイグ先生」（1923年）は直訳だという定評があるが、このような傾向は、実際同時代の訳者にも見られる。魯迅はさらに理論の面から、特に厨川白村『近代文学十講』から象徴主義的表現技法、小品の価値を再認識し、『野草』でそれを実践した。これは人間の無意識を探求する時代の関心に応えたものだと言えよう。

#### ②謝六逸の翻訳と受容

謝六逸は1920年に「文学上の象徴主義とは何か」を発表したが、実際これは厨川白村『近代文学十講』の一節を抄訳したものだ。このように、象徴主義に関する議論はシモンズ→漱石・厨川白村→謝六逸・魯迅というように受け継がれていく過程が見えてくるのだ。1928年に謝六逸は漱石「火鉢」「猫の墓」を訳したが、この訳業は平明で味わい深い小品を翻訳することで現代文、とくに新聞の文体を改善する意図が認められる。

さらに、謝六逸は『水沫集』（1929年）で小品を提唱し、「ペルセボネーの伝説」「昔」を創作した。前者はロセッティの名画「ペルセボネー」と同じ取材であり、後者は「ファム・ファタール」を偲ぶ世紀末的題材だった。これは、「夢十夜」の訳文を掲載した『小説月報』扉絵ロセッティ「リリス婦人」とも響き合っている。その背後には、言葉を絵画のように配置し新しい文体を創出する意図と、ジャーナリズムの急速な発展という時代の要請が隠されている。謝六逸は中国のジャーナリズムの創始者として有名だが、こうした翻訳と創作の面から再評価に値する人物でもあるのだ。

以上の研究を踏まえて、言語学者、文芸理論家である方光燾と漱石文学という新たな課題について、今後さらに掘り下げていきたい。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「1920年代の中国文壇における夏目漱石文学の翻訳」・2020年度日本語日本教育と日本語研究国際シンポジウム・2020年11月28日・同済大学主催

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「1920年代の中国文壇における夏目漱石文学の翻訳——『永日小品』を中心に」(投稿中)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『永日小品』・夏目漱石著、解璞訳注・清華大学出版・2021年10月(校正済、印刷中)